

周布政之助の生涯

(その3)

政務役再任

安政五年（一八五八）周布政之助は保守派にかわって政務役に再任され、長州藩政の中心となって活躍をはじめた。

安政五年は、幕末の政治情勢の中では、幕府政治の転換点となる年であった。

当時の最大の政治問題は、日米通商条約の締結と將軍継嗣問題であった。

幕府は前年よりハリスと交渉を重ね、「自由貿易及び横浜・長崎・新潟・兵庫の開港、江戸・大阪の開市」などを主たる内容とする条約草案について合意に達していた。

幕府は開国反対派を抑えるため、事前に朝廷及び諸大名に条約草案を示し、朝廷の許可（勅許）による条約調印を実現しようとしていた。これが、幕府創設以来、現実の政治から遊離していた朝廷を幕末政治史の舞台に登場さす契機となったものである。

幕府のこうした動向が、「処士横議」といわれる「志士」たちの政治発言を、さらに深める原因となり、「尊王攘夷」運動を激化させることになったのである。

幕府はこの難局を打開するため、幕府権力の強化を図り、この年、四月に大老に就任した井伊直弼は、六月九日、勅許を待

たずに日米通商条約を締結し、六月二十五日には諸大名を総登城させて、十四代將軍慶福の決定を告げ、幕閣を井伊派で固めたのである。

長州藩では、六月の人事異動で、周布政之助の下に、嚶鳴社グループでもあった前田孫右衛門、宍戸九郎兵衛、門藤万里助など尊攘改革派が政権の中枢につき、益田弾正（親施）、浦鞆を中心とした安政改革を推進した。

このグループが後に「正義派」と呼ばれた人々で、坪井九右衛門、椋梨藤太を中心とする藩政改革派と次第に対立を深め、彼らを「俗論派」と呼ぶようになったのである。両派の衝突は元治元年（一八六四）禁門の変で不幸な結果を迎えることになる。

安政改革

藩政の中枢にすわった周布政之助は、安政五年七月富国強兵を目標とする藩政改革に着手した。

なお、日米通商条約締結に対する長州藩の態度は、調印反対を表明すると共に「朝廷に忠節・幕府に信義・祖宗に孝道」の藩は三大綱を決定した。

安政改革の中心をなす軍制改革では農兵編成や様式操練を主たる内容とするもので、軍制改革の一環として西洋の文化・技

術の採用を積極的に推進したところに特色がある。

長州藩の若く有望な藩士を長崎に派遣し洋学を学ばせる（長崎直伝）ことや、洋書講読のため村田蔵六（後の大村益次郎）を登用したのもこの時である。

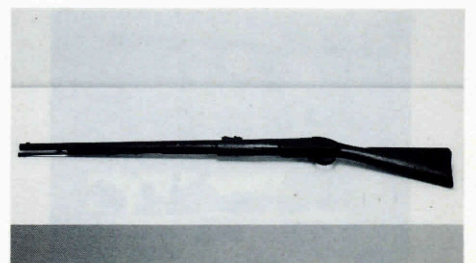
また、洋学の推進のため、明倫館の分館として「西洋学所（博習堂）」を設けた。西洋兵備の充実としては、様式軍艦の建造を行い、丙辰丸について、万延元年（一八六〇）には庚申丸を建造した。

また、新式の西洋銃ゲベール一、〇〇〇挺を長崎で購入し、これを使って銃陣訓練を実施するとともに、軽率編成法によって足軽・中間を主体とする隊編成、装備が定められた。

軍制改革で特に注目すべきものが、農兵採用である。

この「農兵」思想は、村田清風の画期的な着想を具体化したもので、村田清風や周布政之助の先見性を示すものである。この農兵思想が、後の高杉晋作による「奇兵隊」に通じる道を用意したものであった。

安政改革の特色は、人材の登用にも見られる。門閥によって藩政府の役職は決定されていたが、周布政之助は、門閥にとらわれず、明倫館で優秀な成績をあげた者を積極的に採用し、藩政の重要なポストにつけた。後に、尊王攘夷派として中央



▲ 第1次展示室に展示してある西洋銃「ゲベール」。

で活躍する長州藩士は、安政改革で登場して来た人々が多かった。周布政之助が最も期待した人物が、吉田松蔭門下生の久坂玄端であり、高杉晋作であり、共に彼らは、周布政之助の下で中央の政治に登場することになったのである。

周布政之助は、富国強兵の藩政改革の根本は農業にあり、そのためには、貢租（税金）負担者である本百姓の保護及び生産性の維持・発展は不可欠のものであると認識していた。これが「民政充実」を常に平行して行った安政改革の特色でもあった。

周布政之助の政治には、村田清風からの直伝の精神に加えて、開明的な西欧観があり、これこそが、明治維新への道を用意するものであったと云える。

元 山口県立博物館長

石原啓司 著